

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

なのは四期アニメ化希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

### 【Nコード】

N3793Z

### 【作者名】

なのは四期アニメ化希望

### 【あらすじ】

『流星の射手と鋼の走者、若き槍騎士と竜騎の召士、四つの希望が集う時、二つの血を持つ古の若き王が目覚ます…』  
転生者でない聖王と霸王の子供がStrikersの時代に送られる話。

これは『黒い月の聖王』のリメイクです。

## プロローグ（前書き）

新たに書き始めました。よろしくお願いします。

## プロローグ

時は古代ベルカ諸王時代

シュトウラにある城の一室で、2人の若い男女が産まれたばかりの赤ん坊を見つめていた。

「私達の子供…」

「綺麗な金色の髪に『鎧』…君の血を濃く継いでるようだね。」

碧銀色の髪を持つ男…クラウスが、赤ん坊の頬を撫でている金髪の女…オリヴィエに話しかける。

「でも目は貴方と同じよ？」

「うん。紫と青の虹彩異色…シュトウラの目だね。」

「名前は何にしましょう…」

「そうだね…シルバなんてどうだい？」

クラウスは少し悩んでから答える。

「シルバ…『森』って意味ね。」

「うん。僕達の目指す平和で緑溢れる世界…その象徴。」

「そうね…うん！貴方は今からシルバ！シルバ・ゼーゲブレヒトよ！」

そう言つてオリヴィエはシルバを抱き上げる。

「きゃっきゃっ！」

「ふふふ、シルバも喜んでるわ。」

「…この子には平和に過ごして欲しいけど…」

「無理でしょうね…でも、せめて十歳になるまでは何処かに…」

さつきまでの明るい雰囲気が消え、重々しい空気が漂う。

「…シュトウラの辺境の森の中に、ある人が治めている小さい村がある。そこで暫く育てよう。」

「なら私の顔見知りも居た方がいいわね。友人にそこで教育係と護衛を引き受けて貰うように頼んでみるわ。彼女なら安心して任せられるし。」

オリヴィエは頷きながら言う。

「もつとも、この子自身も強くなって貰わなきゃいけないし…よし！この子に僕の霸王流を教えることにするよ。」

「なら、私は『鎧』制御方法を教えるわ。」

「よし。じゃあ今後の方向も決まった事だし村の方に連絡を取ってくるよ。」

そう言っただけでクラウスは走るように部屋を後にした。

部屋に残ったオリヴィエは、シルバを優しくなでながら我が子の未来について考えるのだった。

「母上！父上！」

頭に子猫を乗せた金髪の少年が部屋の中に走り込んでくる。

「久しぶりだね。」

「元気だった？怪我はしてない？」

「むしろ元気が有り余ってるぐらいだよ。」

《GAU!》

頭の上の子猫…レグルスが同意するように吼える。

「それと昔みたいに、私の事はママ、クラウスの事はパパって呼んでほしいな。」

「アリスが母上と父上って呼びなさいって。」

「ちよっシルバ様！何言ってるの？ふん。どう言うことアリス？！？」

アリスのシルバの発言に対し抗議しようとするが、虹色のオーラを纏った修羅の気配に最後まで言葉が続かなかった。

「いえ、あのですね…王家の者としての威厳とかを考えまして…その方がいいと思ったんです。はい。」

「ちよっと、OHANASIしよっか。」

「今なんか発音がおかしかったような…って襟首引つ張らないで下さい！シルバ様も笑ってないで助けて下さいよ！」

アリスはそのままオリヴィエに連れて行かれ見えなくなった。

「そう言えば…父上、突然二人で来るなんてどうかしたの？」

シルバは笑いすぎて腹を押さえながら気になっていたことを聞く。

「ああ、これからのことで重要な話があるんだけど…オリヴィエが戻って来たら話すよ。」

「じゃあ、それまで久しぶりに稽古付けてよ！」

「うん。じゃあ広場に行こうか。」

「こっちはもう準備できたよ。何時でもどうぞ。」

「では、武装形態！」

光が収まりと、大人になったシルバがその場に立っていた。

「行くぜ！！」

そう言うシルバは一瞬で距離を詰め左腕を下からクラウドスに向け振り上げる。

それをクラウドスは右手を添えるように受け止める。

それを予想していたシルバはそのまま左拳に体重を乗せるように力を入れて無理矢理振り抜く。

クラウドスは足に力を入れその場に踏みとどまり左拳をシルバの原に向け突き出す。

「霸王断空拳！！」

シルバはそれを腹に力を入れわざと食らい、その力を利用して上に跳び、クラウドスの背中に降り立ちそのまま振り向きざまに右手で裏拳を打ち出す。

クラウドスはしゃがみながら振り返り裏拳をかわし攻撃に移る。

猛攻を受け後ろに下がり距離を開けたシルバに対し、クラウドスは声

をかける。

「今のは良かったよ、シルバ！」

「そう言いながら、かなり余裕そうだけど……!!」

シルバは返事をしながら再び近づく。

クラウスがそれに対してカウンターを入れようとした瞬間、シルバは特殊なステップを踏み再び後ろを取り、右拳を打ち出す。

「!?」

「霸王断空拳!!」

今度はシルバが断空拳を放つ。

その拳はそのままクラウスに直撃する。

決まった！とシルバが思った瞬間クラウスの拳がシルバの肩に突き刺さり、シルバは回転しながら吹き飛んだ。

「うん。いつもよりかなり早く一本取れたね。」

「一本取れたのは嬉しいけど……かなり痛い。」

「技が決まったからって、すぐ気を抜くからだよ。これからは決まった後も気を抜いちゃ駄目だよ。」

「はい。」

いつの間にか試合を見ていたオリヴィエとアリスが近づいてくる。

「かなり強くなったみたいね。」

「そう言いながらシルバを抱きしめるが……」

「痛い！母上肩が！」

その行為がシルバの怪我を悪化させてしまう事になった。

シルバ達はイスに座ってオリヴィエ達が訪れた理由を聞いていた。

「では、やはりここに来たのは戦争の激化が理由ですか？」

「ええ。シルバには戦争の恐ろしさを知って欲しくて、何度か私の騎士として戦場に立って貰ってたでしょ？」

「…うん…」

オリヴィエの言葉にシルバは辛そうな顔をしながら返事をする。

「これからの戦争はもっと激しくなる…だから逃げて欲しいの。」

「…別の世界ですか？」

「いいえ。」

「…別の『時代』よ。」



## プロローグ（後書き）

シルバ『俺は不死身だ、この世に自分の存在を刻み付けるその日まで、永遠に！』

シルバ「この場はしばらく、『黒い月』からの変更点を書くことになってます。」

キャロ「今回ののは、目の色・戦争への参加…ですね。」

眠り（前書き）

初の予約投稿です。

## 眠り

「別の時代…ですか？」

「ああ、別の時代だ。」

シルバの呟きにクラウスが答える。

「ちよつと待つて下さい陛下！そんな事の出来る魔法聞いたこと有りません！どうやって…」

「もうちよつと静かに話して。」

悲鳴に近い声で話すアリスをオリヴィエが遮る。

「あ、はい……つて、これが叫ばすにいられますか！どうやって送るんですか！？」

「それは俺も気になる。説明してくれ。」

「分かったわ。」

そう言つてオリヴィエは説明を始める。

「先日、ローラン兄様がシルバの為に『コールドスリープ』と呼ばれる魔法を発動させる道具を用意してくれたの。」

「…コールド、スリープ？」

「ええ、体温を下げ、体の成長を止めてに眠らせる魔法。」

「まあ、分かりやすく言えば『冬眠』…かな。」

オリヴィエの言葉をクラウスが補足する。

「私たちはね、シルバに生きて欲しいの。」

いろんな所に行つて、いろんな物を見て、いろんな事をして、自由に生きて欲しい。

でもどうせなら、この時代の誰も知らない世界、未来の世界に生きて欲しい。

これは私達からのお願い。私達がシルバにして欲しいことなの。」

オリヴィエ達はシルバの瞳を見つめながら話す。

「お前は強くなった。もう自分を守ることが出来るほど。」

「俺はまだ父上にも母上にも一回も勝つてない！…！」

「当たり前だよ、そんなに僕は弱くない。その僕から一本取ったんだ。誇って良い。頼む…分かってくれシルバ。」

「そんなの二人の我が侬だ！俺はみんなで居られればいい！」

「…正直ね、この戦争で私達が死んでしまうかもしれないの。我が侬でも良い。言うことを聞いて。このとおりよ。」

おもむろに立ち上がると二人はシルバに頭を下げた。

「…頭を上げて。そこまでされたら…もう断れないよ…」

シルバは泣きながら言う。

「ありがとう、シルバ。」

「でもこれだけは…聞いて欲しい。」

「何んだい？」

「一週間だけ一緒にいて…お願い。」

それを聞いたオリヴィエはシルバを抱き寄せて言った。

「もちろん、私達もそのつもりよ。」

一週間後、村の人達に挨拶を終え四人は聖王家の隠れ家に居た。

「これが…」

「まるで棺ですね…」

シルバとアリスが呟く。

「この中に入ったら私達が魔法を発動させるわ。」

「…うん。」

「ふう…間に合ったみたいだな。」

突然ドアが開き金髪の男性が入ってくる。

「兄上！？」

オリヴィエが驚きの声を上げる。

「どうして…」

「僕が教えたんだ。」

「クラウドス…」

オリヴィエがクラウドスを睨みつける。

「止めなさいオリヴィエ。私が頼んだんだよ。可愛い甥の見送りをさせてくれてね。」

「ローラン伯父様…」

「すまないなシルバ。父上や兄上達がお前に冷たく当たって…」

「そんな…」

「シルバ、お前の無事を願っているよ。」

「ありがとうございます。」

そう言っているとシルバはアリスの方を向く。

「今までありがとう。」

「シルバ様…どうかお元気で。」

そして最後にオリヴィエ達に向き合う。

「シルバ…元気に育ってくれよ。」

「体調には気を付けてね。」

「はい…父上、母上。」

全員との挨拶が終わり、シルバは装置の中に入ったのを確認するとオリヴィエ達は魔法を起動させた。

「どうか…この子が目覚めた時代が平和でありますように。」

オリヴィエの呟きは空に消えていった。

## 眠り（後書き）

シルバ『異物の混じった空間。ここはテメエの知る場所じゃねえんだよ。』

シルバ「今回の相違点！」

キャラ「シルバ君の伯父・コールドスリープ…ですね。」

シルバ「ちなみにローラン伯父様の説明は後々あります。」

## 目覚め（前書き）

かなり短いです。すいませんoysz

## 目覚め

side カリム

数年前から私の元に二つの予言が現れていた。

片方は、管理世界の崩壊ともとれる予言。

そしてもう一つは、私達グラシア家…いや、聖王教会の待ち望んだ物だった。

その予言が出てから、私とシャツハは毎日の様に教会本部の最深部にある『聖王の間』を訪れている。

「騎士カリム、そろそろ時間です。」

「そう…」

私が肩を落として部屋を出ていこうとしたその時、部屋に安置されていた棺が光り出す。

「これは…!？」

「まさか…」

光が収まり金髪の少年が出てくる。

「…ここは…」

「お待ちしておりました…『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒト陛下。」

私は頭を下げながら話しかけた。

side out

「そうか…母上は『ゆりかご』で…」

「はい…クラウド陛下はオリヴィエ陛下以外の方とご結婚なさり、子孫もいらっしゃいます。」

「…父上の子孫か…」

そう言いながらシルバは少し寂しそうな顔をしながら窓の外を眺め



る。

「…空が青い…木も生い茂っている…」

「はい。今は既にベルカの王家はございません。したがって、国同士の戦争も存在しません。」

「…戦争の無い世界…か。」

その後も暫くシルバはこの時代について質問をしていった。

「現在、私は六課と言う部隊に、ロストロギアと呼ばれている聖王家の聖遺物を回収して貰っています。」

「ロストロギア？」

「はい。崩壊した世界や文明の持っていた力の塊を示す言葉です。」

「で？さっき聖王家の聖遺物って言うていたが、何を回収しているんだ？」

「『レリック』です。私がそれを六課に回収するよう依頼したのに理由はあります。」

そう言つとカリムは何かを撫でるように右手を振る。  
すると幾つものウィンドウが空中に現れる。

「数年前から、何者かがレリックを回収しているのです。」

「なに…？」

カリムの言葉にシルバは飲もうとしていた紅茶を降ろす。

「さらにレリックが発見された場所などで高エネルギー研究施設の跡などがあり……」

ガシャン

カリムとシャツハは音のした方を振り返と、シルバが持っていたコップを握りつぶしていた。

「…何処の誰だか知らんが…いい度胸だ…よし、俺をその六課とやらに入れる。」

「「はい？」」

二人はシルバの言葉に思わず間抜けな声を出す。

「だから俺を六課に加える。レリックを利用してる奴は俺がを叩き潰す！」

「しつ、しかし危険すぎます！」

「…カリム、レリックの正体って知っているか？」

「いえ…そこまでは…」

「なら教えてやるよ。聖王ってのはな自らの『鎧』の出力を上げるためにとある力の結晶であるレリックを取り込むんだ。レリックを取り込んだものが死ぬと、取り込まれた力と取り込んだ者の力…二つの力の結晶が生まれる、それがレリックだ。」

「そっ…それではレリックというのは…」

「歴代聖王の遺体だ。」

それを聞いたカリムは少し考え込む。

「…分かりました。明日六課の責任者に相談してみます。」

「ああ、頼む。」

「それとシルバ様にお返しするものがあります。付いてきて下さい。」

「  
そう言うとかリムは立ち上がり歩き出した。」

シルバ達は第8資料保管庫と書かれた扉の前に着いた。

「少しお待ち下さい。」

カリムはそう言うのと扉の横にある機械にカードを通した。

ガチャン

鍵が外れ扉が開く。

中には直径１メートルほどの巨大な水晶が置いてあった。

シルバは水晶に手を当てある名前を呼ぶ。

「おいで！レグルス！」

《GAOOOOOO!!》

シルバが名前を呼んだ瞬間、激しい光と巨大な雄叫びがあがる。

「きゃあ!?!」

少しし光が止むとそこには綺麗な鬣を生やした巨大な白い獅子がいた。

《GAOOOOOO!!》

獅子はシルバの前に行き頭を下げてから再び遠吠えを上げる。

まるで主を帰還を祝福するかのように…

## 目覚め（後書き）

スカリエッティ『廻る廻る宙の中心…』

シルバ「相違点！」

キャロ「私と会ってません・八神部隊長の代わりにシャツハさんが話し合いに出ている。」

シルバ「ちなみに俺が眠っていた部屋…『聖王の間』は幹部以上の  
人以外は入れないらしい。」

機動六課へ（前書き）

今回も短いです。

## 機動六課へ

「聖王教会からの派遣？」

「ええ、少し事情があるの…良いかしら？」

「そら構わへけんけど…どんな子や？」

「は yet はカリムに訪ねる。」

「『レリック』の本来の持ち主。訳があつて、今は私の義理の弟よ。」

「

「…ちょいまちい。レリックの持ち主言つたか？」

「ええ。」

「あれはロストロギアやる？持ち主なんかおるんか？そんなら本局で保護した方が…」

「事情があるのよ。」

「……」

「カリムは事情の部分を強調して言う。」

「別に意地悪で隠してる訳じゃないわ。」

「…分かつとる。はあ…カリムには世話になつとるし…ええよ。でもいつか必ず話して貰うで。」

「分かつてるわ。」

「カリムはモニターでシャツハを呼び出す。」

「シャツハ、彼を連れてきて。」

「【かしこまりました、騎士カリム。】」

「モニターが閉じて暫くし、扉が開かれる。」

「紹介するわ、レリックの正統な所有者…シルバ・S・グラシアよ。」

「

「よろしく。」

「此方こそ。」

「シルバに返事をする。」

「書類なんかの手続きが有るから、六課への派遣は一週間後になる」

と思うわ。」

「了解や。こつちも準備しとく。」

「彼女が今の『夜天の王』か…」

「『夜天の書』を御存知なんですか？」

はやてが去った部屋でシルバ達三人が話していた。

「ああ、あらゆる魔導を記録し使う王と一騎当千の四人の守護騎士…だったかな？どの国も仲間に引き入れよう必死だったからな。」

「そんなに有名だったんですか？」

「ああ、何でも力ずくで仲間にしようとしたガレアの死体兵1000体を、守護騎士の一人が壊滅させたとか。名前は確か…『烈火の将』だったかな？」

「烈火の将…騎士シグナムの事ですな。」

シャツハが空になったカップに紅茶のお代わりを注ぎながら言う。

「彼女はバトルマニア…決闘好きなので、一度手合わせをしてみたいかがですか？」

「そうだな…一騎当千の古強者か…俺の霸王流はどこまで通用するか試してみたいな。」

そう言いながらシルバは紅茶を飲み干す。

「では、これからの予定をお話します。」

話が一段落付いたのを見てカリムが口を開く。

「陛下には一週間で、この時代の基本的な知識や資格を取得していただきます。言語に関しては昨日渡したデバイス…指輪が翻訳してくれます。」

「この指輪がねえ…」

そう言いながら右手の中指にはめた指輪を見る。

「それと古い文献により、レグルスもアニマル型ユニゾンデバイス

と呼ばれる物だということが分かりました。」

「ユニゾンデバイス？」

「はい。使用者とユニゾンして技の威力などを強化するデバイスです。」

「ふーん…それで？文献には他に何て書いてあったんだ？」

「レグルスの詳細が少し。」

「話してくれ。」

シルバはカリムに催促する。

「はい。歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイスで、歴代聖王の知識や記憶などを保管する一種の図書館の様なものであると同時に、ユニゾン時に身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にするもの…と。あとは、とある兵器に対する絶対的な抑止力とも書いてありました。」

「なるほどな…」

シルバはそう呟くとレグルスに目を向けた。

一週間後、シルバとカリム、はやては聖王教会の執務室にいた。

「では、聖王教会教会騎士団騎士シルバ・S・グラシアを機動六課に正式にいたします。」

カリムがシルバとはやてを見ながら言う

「シルバ・S・グラシア、了解した。」

シルバはそれを了承し…

「機動六課、了解いたしました。」

はやても書類を受理した。



side シルバ

聖王教会からの引継作業後、俺ははやてに連れられて機動六課に来た。

「と言うわけで、この子が聖王教会から派遣されたシルバ君や！」  
現在は、六課のみなさんと顔合わせ中。

「えゝ、聖王教会の騎士シルバ・S・グラシア、頭の上に乗ってるのはレグルスだ。よろしく！」

「よろしく〜!!」

六課のみんなが返事してくれた。

「ああ、そうや！エリオにキャラ、ちよつと来て」

「はっはい！」

はやてに呼ばれ、俺と同じ年ぐらいの子供が2人走ってきた。

「シルバは2人と同じ年ぐらいやろ？仲良くしてあげてな。」

「はい！僕はエリオ・モンディアル三等陸士です！」

「えつと…キャラ、キャラ・ル・ルシエ三等陸士です。キャラって呼んでください。」

「…」

うわ…顔真っ赤だ…

「…エリオもキャラも敬語じゃなくて良いよ。」

「うん。」

「はい…」

うゝん…気まずい…

「そうだ！騎士シグナムって誰だか分かるか？」

ふとシャッハとの会話を思い出し訊く。

「シグナム副隊長？うん、分かるよ。」

「教えてくれ。」

「ちよつと待ってて…シグナム副隊長!!」

「何だ？」

エリオがピンクの髪をポニーテールとやらしにしている女性を呼ぶ。

「アンタが騎士シグナムか？」

「そうだが…お前は確かシルバ・S・グラシアだったな。」

自然体だが隙がない…

「シャツハから聞いた通り、隙が一切無いな。」

「そう言うお前も隙がないな。その歳でこれほどとは…恐れ入る。」

「お褒めに与り光栄だ。」

「実に戦いがいがあるそうだ…どうだ？模擬戦でもしないか？」

「いいだろう。望むところだ。」

さて…俺の『拳』はどこまで届くかな…

side out

## 機動六課へ（後書き）

シルバ『理想を抱いて溺死しろ!!』

キャラ『黒い月』との相違点!』

シルバ「はやてにカリムの義理の弟で説明・はやてが俺の正体を知らない・『夜天の書』の話が出てくる。」

キャラ「ちなみにシルバ君とイクスヴェリアちゃんは面識ありません。」

シルバ「…イクスヴェリアって誰?」

キャラ「分かんない。今、作者からのカンペが出たの…」

## 拳と剣（前書き）

出来れば年内に『黒い月』の所まで追いつきたいです。

# 拳と剣

シルバとシグナムは模擬戦をする場所について話し合っていた。

「何処でやるんだ？」

「訓練所だ。着いてこい。」

そう言って二人は歩き出す。

「……シルバ君がどんな感じで戦うのか気になるし、私達も行こうか。」

L

なのは、この提案によって全員で模擬戦を見ることになった。

訓練所に出来上がった、廃墟の中でシルバとシグナムが対峙する。

「レヴァンティン、セツトアップ！」

set up

一瞬、光がシグナムを包み中から剣を持ち、騎士甲冑に身を包んだ姿で出てきた。

「さて、取り敢えず名を名乗ろう。私は『剣の騎士』シグナム。そして『炎の魔剣』レヴァンティン。」

「じゃあ、此方も改めて名乗ろう。『拳の騎士』シルバ。こいつは『小さき王』レグルス。武装形態!」

名乗り終えると同時にシルバは武装形態により大人の姿になる。

「ほお、特殊な強化魔法か……面白い！」

「来いレグルス！ユニゾン……イン！」

《G O O O O O O ! ! 》

「なに！？そいつはユニゾンデバイスだったのか！？」

相手……シグナムは驚愕の声を上げる。

「準備は出来たぞ。」

「あの子猫、使い魔：守護獣じゃ無かったの!？」

フェイトが驚きの声を上げる。

「あれはアニマル型ユニゾンデバイスっちゅうやつらしいで。」

はやてが説明する。

「でも動物型のユニゾンデバイスなんて聞いたこと無いよ?」

なのはが質問する。

「まあ、うちもカリムから聞いたのが初めてやしな。」

「動物型のデバイス：解析してみたい!」

メカニックのシャーリーが興奮気味に言う。

「止めといた方がいいで：無闇に触ろうとすると噛まれるらしいで。」

はやてが言う。

「大丈夫ですよ!だって子猫じゃないですが。」

「：あれは魔力の消費を押さえるためなんやと。実際は大きくて白いライオンらしいで：」

「またまたそんな冗談を 模擬戦終わったら頼んでみよつと。」

はやての言葉を冗談と受け取ったシャーリーはどうやって解析させて貰おうかを考え始めた。

シルバの準備が終わると二人は同時に前に出た。

接近と同時にシグナムが剣を振り、シルバはそれを左手の甲で上に受け流すと同時に腹に向け右拳を放つ。

「あまい!」

しかしそれを予想していたシグナムに簡単に避けられてしまう。  
そのまま受け流された剣を上から振り下ろす。

今度は受け流さず、右足を軸にからだを回転させ、わき腹に向け左蹴りを放つ。

「吹き飛ばし！」

「グッ」

蹴りをわき腹にモロに受け、シグナムが吹き飛ばす。

「やはり強いな…今は効いたぞ。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「ならもうちょっと苦しそうにして欲しいな。」

そう文句を言うシルバにも笑みが浮かんでいる。

「久々の決闘で調子が漸く出てきたのでな…」

「段々ユニゾンに慣れて来た事だし…」

「これからが本番だ！！」

再びお互いに接近し高速で打ち合う。

拳を剣の腹で。打ち下ろしを腕で。蹴りを鞘で。横風を掌で。

弾く。逸らす。防ぐ。受ける。

しばらく激しい攻防を繰り返して、埒が明かないと悟り、同時にお互い一歩下がる。

シルバは拳を、シグナムは剣を、突き出す。

「紫電一閃！！」

シグナムはカートリッジを使い、魔力変換の炎を纏わせ威力を高めた剣撃を。

「式式 紅蓮拳！！」

シルバはレグルスの力を使い、魔力変換で炎を作り出力を上げた拳撃を。

「ウオオオオッ！！」

それぞれ渾身の力で打ち出す。

しばらく力は均衡したが、お互いの炎が混ざり合い爆発を起こす。  
その爆風を利用してシグナムが後ろに下がる。

「式式 獅子紅爆炎拳！！」

それを追撃するように、シルバは全魔力で作った獅子の頭の形をした炎を拳に纏わせ放つ。

《シュランゲフォルム！》

「飛竜一閃！！」

それに合わせシグナムは蛇腹形態になったレヴァンティンを放った。二つの技がぶつかり合い、先程とは比にならないほどの大爆発が起き、煙が立ちこめる。

しばらくし煙が晴れると気絶した『拳』とボロボロに成りながらも立っている『剣』がそこにいた。



## 拳と剣（後書き）

オリヴィエ『　　ついて来れるか。』

キャロ「相違点！」

シルバ「今回は無し！」

キャロ「嘘だよ！？小さいのが有るよ！！！」

シルバ「えゝめんどい…俺の二つ名が『黒い月の騎士』から『拳の騎士』に変更・はやてがレグルスの変身？を見ていないので『らしい』程度しか分からない。」

## 六課の初日（前書き）

今回は少しSEKKYOっぽいです。

訂正しました

## 六課の初日

side シルバ

ゆっくりと意識が浮上していく。

疲れ切り重い目蓋を開けると天井が見えた。

「おっ、目覚めたんか？」

「はやて、か…」

「能力リミッターで全力を出せないとは言え、あのシグナムにあそこまで傷を付けるとは思わへんかったわ。」

あれで全力じゃないのか…

「流石は一騎当千の古強者…」

「さて、もう動けそうやし行くで。」

「…行く？」

「みんなの所や！」

side out

はやてに連れられてシルバはちょっとした休憩室にやってきた。

「ライトニングの自己紹介は終わつとるから、スターズの二人からやな。」

はやての言葉にスバルが前に出る。

「はい。私はスバル・ナカジマ！階級は二等陸士！よろしくね、シルバ！」

「スバルね…よろしく。」

（この感じは何処かで…うゝん…）

シルバが頭の隅で考え事をしていると、ティアナが話しかける。

「私はティアナ・ランスター。階級はスバルと同じ二等陸士。よろ

しく。」

「ティアナね。よろしく。」

「次は私達隊長陣かな？私はライトニング分隊隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウンだよ。よろしくね？」

「私はスターズ分隊の隊長、高町なのは。みんなの訓練の先生でもあるの。」

フェイトに続きなのはも自己紹介をする。

「フェイトになのは…ね。よろしく。」

「あたしはスターズの副隊長のヴィータだ。二つ名は『鉄槌の騎士』。よろしく。」

「よろしく、ヴィータ。」（守護騎士の一人『紅の鉄騎』か…）

「私は医務官のシャマルよ。これでも騎士で二つ名は『湖の騎士』。よろしくね。」

「よろしく。」（後方支援の守護騎士…『風の癒し手』だな…）

「次は私です…部隊長補佐のラインフォース？空曹長なのです！」  
（ツヴァイ？）

シルバは引っかけかりを感じ、デバイスを使って意味を調べる。

「…二番目？」

「はいです…二代目祝福の風、ラインフォースなのです…」

（…ああ、カリムが言ってた『管理人格』の名前を貰った子が…）  
「よろしく、ラインフォース。」

「む…ラインで良いです！」

ラインが頬を膨らませて言う。

「…よろしく、ライン。」

「はいです…」

最後に、はやてが口を開く。

「シルバのコールサインやけど、セイクリッド01や。」

全員の自己紹介が終わり、シルバは一人で六課の隊舎内を散策していた。

「シルバ君！」

「キャラ？どうしたの？」

「シルバ君に少し聞きたい事があって…」

「聞きたい事？何？」

「えっと…ここではちよっと…」

話辛そうにキャラが言う。

「うん…じゃあ、俺の部屋で良い？」

「…うん。」

シルバはキャラを連れて自分にあてがわれた部屋に行く。

「ここだよ。」

「お邪魔します〜」

「どうぞ。」

「…シルバ君って一人部屋なの？」

部屋を見渡しながらキャラが聞く。

「ああ…で？聞きたい事って？」

「……シルバ君は…自分の力が怖いって思ったこと…有る？」

「…自分の力が怖いね…」

シルバは少し考え込む。

「うん…もしも自分の力で大切な人を傷つけたら…とかつて…」

「……怖いさ。仲間を傷つけたら…って考えるとね。」

「じゃ、じゃあ「でも！」っ！？」

シルバはキャラの言葉を遮って言う。

「俺は力が無くて仲間を守れない方が怖い。」

「…仲間を守れない…」

「ああ、何のために力を使うのか…それが大事なんだと思う。」

「何のために使うか…」

「そう。キャラはどう思う？仲間を傷付けなければ良い？仲間を守

りたい？それとも二度と使いたくない？」

「私は…」

「別に今すぐ結論を出さなきゃいけない訳じゃないさ。」

「…うん…」

キャロは俯きながら返事をする。

「…キャロ・ル・ルシエ、その悩みが君の弱さであり、強さなんだよ。…もうこんな時間か…」

いつの間にか窓から見える景色は真っ暗だった。

「おやすみ、キャロ。」

「…うん…おやすみ、シルバ君。」

キャロが帰った後、シルバは布団に入り、ふと思った。

「…レグルスどこ行っただろ…」

シルバは念のためドアを少し開けて眠りについた。

おまけ

「あれどこ行っちゃったのかな？」

「…何してるんですか？シャーリーさん。」

「ティアナにスバル！良いところに！今ね、シルバ君の子猫を探してるんだけど知らない？」

「レグルスなら休憩室の椅子で寝てましたよ。」

「ありがとう！ティアナ。」

「何だっただんどう？」

「さあ？それよりティアンおなか空いちやっただよ」

「はいはい。」

「やっと見つけた！」

《ZZZZ》

「寝てますね〜チャンスです!」

《!!--!》

「よし、捕まえた!」

《GAOOOOOO!!--!》

「えっ…ぎゃ〜!?!」

次の日、無数の歯形があるメカニックが休憩室で見つかったとか…

「……何でお前ライオンモードなの?」

《GAO!!--!》

## 六課の初日（後書き）

シルバ『誰エ敵に回したか分かってンのかオマエ。』

シルバ「相違点！」

キャロ「シルバ君が負けに納得してる・自己紹介時の反応・私とのお話。」



そんなある日（前書き）

今回は質問タイムです。

## そんなある日

「オラオラオラオラオラ!!」

シルバは自分に向かってくる魔力弾を拳で叩き落とす。

「すっ、すごい…」

「あんなに多くの魔力弾を…」

キヤロとエリオが呟く。

「でもさ…あれで良いの？」

「多分ダメね。ヴィータ副隊長の額に青筋立ってるし。」

スバルの声にティアナが呆れながら答える。

「シルバ…テメエ…この訓練の意味分かってんのか!？」

ヴィータの怒鳴り声に、なのはは一旦魔力弾を止める。

「向かってくる魔力弾を防ぐ。」

「そーだよ!! 防ぐんだよ!! テメエのは叩き落とすつつうんだよ

!!」

「まあまあ落ち着いてヴィータちゃん。」

怒っているヴィータをなのはが宥める。

「いや…どうも防御系は苦手で…」

「苦手だから訓練するんだろうが!!」

………

「はあはあはあ…取り合えず訓練の合間に練習しとけよ。」

「りょーかい。」

暫くして落ち着いたヴィータに言われシルバは返事をする。

「じゃあ、みなでお昼ご飯にしようか。」

「……はい!!」

なのは達はシルバ達5人の後ろについて行く形で歩き出す。

「しかし、よく考えたらシルバのやった事ってスゲーよな…」

「うん、私も驚いちゃった。」

ヴィータの言葉になのはが頷く。

「この前シグナムをあそこまで追い込んだことと言い…アイツ何モンなんだ？」

「少なくともスゴい努力が必要だよね…」

「それに…アイツの戦い方は…まるで…」

「どうしたの？」

（まるで…何かに駆られてる様な…）

「何でもねーよ。」

ヴィータは頭に浮かんだ考えを首を振って消し、なのはに返事をした。

「あつ！アタシは用事があるから一緒に食べねーわ。」

「えゝそうなの？残念…」

「俺の流派？」

シルバはラーメンを食べる手を止めてスバルに聞き返す。

「うん！明らかストライクアーツじゃないし…気になったの！」

「俺のはベルカ古流武術だ。」

「へゝ…それって私も出来る？」

「無理だ。小さい頃から特別な鍛え方しないといけないからな。」

「小さい頃からって…何時ぐらいから？」

ティアナがシルバに尋ねる。

「四、五歳ぐらい。」

「アンタもそのぐらいから鍛えてたってわけね…」

ティアナは複雑そうな顔をしながら言う。

「僕も聞きたい事が…シグナム副隊長と戦った時に大人に成った様に見えたんだけど…」

「アレは身体強化魔法の一種らしい。」

エリオの呟きにシルバが答える。

「らしい？」

「ああ、正確な事は分からないんだよ。カリム曰く同じ事が出来る魔法があるのでそう言うことにしましょう…だそうだ。」

「ものすごく適当に決めた…みたいに聞こえるよ…」

キヤロが呟く。

「そう言えば…シルバ君って指揮官訓練みたいなを受けたこと有る？」

突然、今まで会話を聞いているだけだったなのはが聞く。

「うん…指揮官訓練とは違うけど兵法を少しだけ。」

「やっぱり…シルバ君、指揮官訓練受けてみない？」

「いや、軍略を考えるのは軍師の役目だからな。」

そう言ってシルバはティアナを見る。

「そっか…じゃあティアナを誘うことにするよ。」

「私!？」

いきなり名前を呼ばれたティアナが驚く。

「うん。ティアナの指示は的確だし筋が通ってるから向いてると思うよ。」

「い、いえ…あの…戦闘訓練だけでいっぱい입니다…」

ティアナは冷や汗を流しながら答えた。

## そんなある日（後書き）

シャーリー『この街の全てを敵に回しても止まる訳にはいかないんだっ！！！』

キャロ「今回の相違点！！」

シルバ「全部。」

キャロ「短いよ！？それに全部でもないし！！」

シルバ「えっと…質問は『みんなで生きる時代』から、後は俺の魔法訓練の風景だね。」

## ファーストアラート

side シルバ

あの模擬戦の後、二日に一回シグナムと模擬戦をしている。

ウィータからは、シールドなどの基礎魔法を教えてもらった。そのとき判明したのだが、レグルスは魔法の補佐が出来ないらしい。

「おい、シルバ。今日もやるか？」

前から来たシグナムに訊ねられる。

「ああ、頼む。」

「あつ、おったおった。」

「うん？はやてかどうした？」

「カリムからの呼び出しや。シルバ君も連れて来て欲しいんやと。」

「了解。シグナム…」

「ああ、わかった。」

「悪いな。」

「かまわん。」

そのままシグナムと別れて、はやてについて行く。

「呼びだして事は…レリックか…」

「そうとも限らへんけどな。」

「行けば分かるか…所でどうやっていくんだ？」

「フェイトちゃんは6番ポートに用があるらしいから、ついでに送ってもらふんよ。」

「ふん。」

「フェイトちゃん！遅れてもったか？」

「大丈夫だよ。シルバも連れて行くの？」

「すまへんな、増えてもうて。」

「いいよ。じゃあ乗って。」

「あいよ。」

side out

「フェイトさん！」

「八神部隊長！」

「あとシルバも。」

「うん。」

「俺はおまけ扱いか……」

ちょうど早朝訓練が終わり、隊舎に戻るところだったらしい。

「すごい！これフェイト隊長の車だったんですか？」

ティアナが車を眺めながら言う。

「そうだよ。地上での移動手段なんだ。」

「みんな練習の方はどなんや？」

「あゝ」

「がんばってます。」

4人が苦笑いしながら答える。

「エリオ、キャラゴめんね。私は二人の隊長なのに全然見てあげられなくて。」

「あついえ、そんな……」 「大丈夫です。」

「四人ともいい感じで育ってるよ。」

「そうか！シルバ君も強くなってるらしいし頼もしいな！」

「3人は今からお出かけですか？」

「私とシルバ君は協会本部でカリムと会談や。」

「私は8番ポートまで。お昼には戻る予定だから一緒に食べようね、エリオ、キャラ」

「「はい！」」

会話を終えるとフェイトは窓を閉じて車を発進させた。

「聖王教会騎士団の魔導騎士代表代行で管理局本局の理事官カリム・グラシアさんか…私はお会いしたこと無いんだけど…」

「そうやったね。」

「はやては何時からの付き合いなんだ？」

後ろの席からシルバが声をかける。

「えっと…教会騎士団の仕事で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかの頃のはずやから…って何でシートベルトしてへんの!？」

返事をしながら後ろを振り返りシルバを見て叫ぶ。

「ふえ!？」

突然の声に驚きフェイトは思わずブレーキを踏んでしまった。

「ぐえ!？」

当然シートベルトをしていないシルバは前の席に顔面から突っ込みカエルを潰したような声を出す。

「ごめんね!!大丈夫!？」

「気にする事ないよフェイトちゃん。シートベルトして無いシルバ君が悪いんや。」

はやては呆れながら言う。

「痛い…そう言えば何か付けろってカリムに言われたな…」

「当たり前やろ!…」

「叫ぶなはやて…うるさいぞ。」

「…フェイトちゃん。このバカ放り出してええか？」

「ええ!？駄目だよ!」

そんな会話が聖王教会の前に着くまで続いたとか。

【騎士カリム、騎士はやてと陞…騎士シルバがいらっしやいました。



」  
書類仕事をしているカリムに赤みがかった短髪の女性：シャツハ・  
ヌエラがモニターで声をかける。

「早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい。」

【はい。】

「それからお茶を三つ、ファーストリーの良いところのをミルク  
と砂糖付きでね。」

【かしこまりました。】

「よしと。」

そう言いながらカリムは書類を脇に寄せる。

コンコン

「どうぞ。」

「カリム、しばらくぶりやね。」

「久しぶり。」

「二人ともいらっしやい。」

「はやて、部隊の方は順調？」

「どっかの誰かさんが報告書を出してくれへんこと以外は順調や。」

「あちつ。この紅茶おいしいな……」

「……」

「……」

「はやて、部隊の方は順調？」

「部隊はカリムのおかげで順調や。」

「そう言うことにしておくといういろいろお願いもしやすいかな。」

「何や、今日会って話すんはお願い方面か？」

「……」

カリムは真剣な顔になり部屋のカーテンを閉める。

そして幾つかモニターを出す。

それを見てはやては真面目な顔になり、シルバは紅茶を飲むのを止めた。

「このガジェット…新型？」

「いままでの1型以外に新しいのが2種類。戦闘性能はまだ不明だけど…、これ3型はわりと大型ね。本局にはまだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたんだけど…」

「それより俺は真ん中下のが気になるんだか…」

「それが今日の問題。一昨日付でミットチルダに運び込まれた不審貨物。」

「レリックやね？」

「その可能性が高いから彼を連れてきてもらったの。」

「なるほどな…これは間違いなくレリックだ。」

「やはり…2型と3型が発見されたのも昨日からだし…」

「ガジェット達がレリックを発見するまでの予想時間は？」

「早ければ今日明日。」

「そやけどおかしいな…レリックが出てるのがちよと早いような…」

「おい、出てくるのが早いつてどういう事だ？」

「今までは一つ出てくると次のが見つかるまでいつも結構の時間がかかるやけど…それが今回はちよと早いんよ。」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか…」

「なるほどな…」

「レリック事件も、その後に起きるはずの事件も、対処を失敗する訳にはいかないもの。」

「…」

カリムの言葉を聞き、はやてはカーテンを開ける。

「はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。カリムが力を貸してくれたお陰で部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん、新

人フオワード達も実戦可能。それに…レリックの本来の持ち主まで居るんやから。」

「そう言うこと。だからそんな辛気臭い顔すんなよ。」

A L E T

「「「!?!?!」」」

A L E T

「このアラートって…」

「一級警戒態勢!?!」

なのは達が新デバイスの説明をしていると、突然アラートが鳴り始めた。

「グリフィス君!」

なのはが画面に呼びかける。

【はい!教会本部から出動要請です!】

【なのは隊長フェイト隊長グリフィス君、こちらはやて!】  
「うん。」

【状況は?】

フェイトが状況を訊ねる。

「教会騎士団の調査部が追っていたレリックらしき物が見つかったんよ。場所はエーリムの山岳地区。対象は、山岳リニアールで移動中。」

【移動中って…】

【まさか…】

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアール内のガジェットは、最低でも三十体。大型や飛行型、未確認タイプも出てるかもしれない。いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃんいけるか？」

はやてが二人に聞く。

【私はいつでも。】

【私も！】

隊長達が返事をする。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもOKか？」

【【はい！！】】

四人も声を揃え返事をする。

「よし、ええお返事や！シフトはAの3！グリフィス君は隊舎での指揮！リインは現場管制や！」

【【はい！】】

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場での指揮！」

【【了解！】】

はやては全員に指示を出した後、締めくくろうとする。

「ほんなら…「誰でも良いレグルスを連れて行ってくれ！」…なんで人の話をさえぎるんや！！まあ、ええわ機動六課フォワード部隊出勤！」

【【はい！】】

フォワード全員が返事をした。

side シルバ

「はやて！俺はみんなと合流するぞ！」

はやてに声をかける。

「そんなこと言っても…どうやって行くんや？」

えつと確か…

「カリム、鍵！」

「はい！」

カリムから鍵を受け取る。

「それは？」

「俺のバイクの鍵だ！」

「ちょい待ちい！」

ドアから出て行こうとするとはやてに止められた。

「自分、バイク運転できるんか！？」

「ああ、出来るぞ。」

「免許は！？」

「なんだそれ？」

「知らんのかい！！」

何だよ…突然怒んなよ。

「怒るに決まっとなるやる！！」

「こころを読むな！！」

「まあまあ落ち着いて、はやて。騎士シルバ、免許というのは先日渡されたカードですよ。」

「ああ！あのカードか…」

「何時の間に取ってたんや！？」

「六課に行く前。」

「はあ…」

はやてがため息を付く

「まあええ、頼むでシルバ！」

「了解。あつ、そうだ。みんなの乗ってるへりと通信したいんだか…」

「はいな。今送る。」

「よし。じゃあ、セクリッド01、シルバ・S・グラシア行くぜ！」

side out

## ファーストアラート（後書き）

シルバ『大人しく尻尾を巻きつつ泣いて、無様に元の居場所に引き返しやがれエ！！』

シルバ「今回の相違点！！」

キャロ「内容は変わってませんね。少し台詞が違いますが。」

## 初出勤（1）（前書き）

タイトルの通り何回かの別れてます。

… 年内に元の場所まで辿り着けるかな…これ…

## 初出勤(1)

side キャロ

気付くと私は暗闇一人で立っていた。

チリン

不意に鈴の音が聞こえ、俯いていた顔を上げる。

目の前にテントのような建物があり、中には村の長老とおばあちゃん、そして小さい私と私の腕に抱かれているフリードがいる。

「アルザスの竜召喚部族、ルシエの末裔キャロよ。」

長老が小さい私に話しかける。

「僅か六歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた。お前は真、素晴らしき竜召喚師よ……」

その言葉と裏腹に長老の顔は厳しい。

「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ。」

「え？」

「キョクル」

「すまん……お前をこれ以上、この里へ置くわけにはいかんのじゃ……」

おばあちゃんが悲しい顔をする。

また私は闇の中で一人になる。

「竜召喚は危険な力……」

自分の両手を見つめる

「人を傷つける、怖い力……」

不意にシルバ君の顔が頭に浮かぶ。

「何のために力を使うのか……それが大事なんだと思う。」

「私は……」

ペロ

「ひゃう!？」



レグルスに頬を舐められ、夢から現実へと戻り、移動中だという事を思い出した。

side out

機動六課オペレーションルームでグリフィス、シャーリー、ルキノ、アルトの四人が巨大モニターに映る車両を監視しながら、情報を整理している。

「問題の貨物車両、速度70を維持、依然進行中です。」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが…」

アルトとルキノがモニターを見ながら現状を報告する。

「時間の問題か…」

報告を聞きグリフィスが呟くと同時にオペレーションルームにサイレンが鳴り響く。

「アルト！ルキノ！広域スキャン！サーチャー空へ！」

シャーリーは二人に指示を飛ばしながらパネルを操作しモニターに拡大映像を映し出した。

「ガジェット反応！空から！？」

「航空型！現地観測隊を捕捉！」

アルトとルキノが驚きの声を上げる。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車止めて現場に向かうから飛行許可をお願い！」

「了解！市街地個人飛行、承認します。」

山の間をぬって飛ぶヘリの中。

「ヴァイス君！私も出るよ、フェイト隊長と二人で空を抑える。」  
なのはが操縦席に顔を出し、ヴァイスに頼む。

「うつす！なのはさん、お願いします！」

ヴァイスはハッチを開ける。

「じゃ、ちよつと出てくるけど、みんなも頑張つてズバツとやつつけちゃおう！」

「「はい！」」

「…はい…」

キャラの返事が少し遅れる。

「キャラ。」

なのはに声をかけられ、キャラの肩がふるえる。

「大丈夫、そんなに緊張しなくても。」

キャラに近づき両手で顔を包む。

「離れてても通信で繋がってる、独りじゃないから。ピンチの時は助け合えるし、キャラの魔法はみんなを守ってあげられる、優しく強い力なんだから…ね？」

キャラに向かって、笑みを浮かべる。

【こちらシルバ！】

なのはの話が終わると同時にモニターが現れる。

「今、俺もそっちに向かつてるから！」

「なんでバイクに乗ってるの!？」

「シルバって免許持ってるんすよ。」

なのはの驚きにヴァイスが答える。

「なら良いんだけど…とりあえず。」

なのはがハッチに向かう。

「スターズ01、高町なのは！行きますす！」

なのははハッチから飛び降りる。

《Standby ready》

「レイジングハート、セーットアップ！」

落下する中、左手を横に振るとレイジングハートが光り輝く。

レイジングハートは起動状態に変わる。

なのはの髪型はサイドポニーテールからツインテールになり、白いバリアジャケットを身に纏うと足に翼を作り飛んでいく。

【お前等も空中でセツトアップするのか？】

シルバが4人に訊ねる。

「えっ？そのつもりだけど…」

「当たり前でしょ。」

「そのつもりです。」

スバル、ティアナ、エリオの順番で答える。

【…キャラ？】

唯一返事の無かったキャラに話しかける。

「えっ？あつ、何？」

暗い顔をして俯いていた為か話を聞いていなかったようだ。

【キャラ…まだ結論は出ないか？】

「えっ？」

【この前の質問の答え。】

「…」

キャラはうなづく。

【…ゆっくり悩めよ。】

「でも…」

【結論が出るまでは…俺と一緒に戦ってあげるから。】

「…うん！ありがとう！／／／」

キャラは顔を真つ赤にしながら笑顔で返事をした。

「あの…そろそろ作戦の話をしていいですか？」

2人の会話が終わったのを見てリインが話しかける。

【いいよ。】

「はっ、はい／／／」

普通に返事をしたシルバに対し、キャラは恥ずかしそうに返事をする。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、レリ

ツクを安全に確保すること。ですから、スターズ分隊とライトニング分隊には別れてガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです。それとシルバは着き次第ライトニングに合流です。レリックはここ、7両目の重要貨物室。スターズかライトニング、先に到達したほうがレリックを確保するですよ！」

「……了解！」「……」

「で……」

5人の返事を聞き、リインはその場で一回転する。

「私も現場におりて、管制を担当するです！」

騎士甲冑を身に纏いニッコリ笑う。

【じゃあ俺は急ぐために運転に集中するから。】

そう言うとしルバは通信を切る。

「さ……て新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ！準備はいいか？」

ハッチを開け、ヴァイスがワードメンバーに声をかける。

まずはスバルとティアナがハッチに向かう。

「スターズ03、スバル・ナカジマ！」

「スターズ04、ティアナランスター！」

「……行きます！」

2人はお互いの顔を見合わせ、一気に飛び降りた。

「行くよ、マツハキヤリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「……セットアップ！」

《standby ready》

落下中の2人の声に応え、マツハキヤリバーとクロスミラージュは起動状態に変化する。

2人は入隊前に着ていたジャケットをベースに、スターズの隊長であるなのはのものを動きやすいように改良されたバリアジャケットを纏う。

マツハキヤリバーはローラーシューズに変わりさらにリボルバーナ

ツクルを瞬間装着し、クロスミラージユは拳銃に変わる。

「次、ライトニング！チビ共、気い付けてな。」

「はい！」

ヴァイスは、エリオとキャロに声をかけた。

「大丈夫？」

「うん！シルバ君のお陰で元気出たから。」

「よかった。」

「心配してくれてありがとう。」

2人は顔を見合わせてから…

「ライトニング03、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュクル！」

《GAO!》

「あつ！後レグルス！」

「行きます！」

かけ声と共に、一気に飛び降りる2人。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「セットアップ！」2人の声に反応しデバイスが一瞬光り起動状態に変化する。

エリオは赤い服に白いコートを纏ったものに、キャロはピンクの服に白いマントを纏い、白くて丸い帽子のバリアジャケット。

ストラーダは槍に、ケリユケイオンはグローブに変わった。

車両の前方にスターズか、後方にはライトニングと本来の姿に戻ったレグルスが降り立った。

## 初出勤（１）（後書き）

クラウス『私は戦いを否定しない。しかし、強い者が弱い者を一方的に殺すことは、断じて許さない！撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ！』

シルバ「随分と短くなったな…」

キャロ「受験勉強の合間に書いてるから長いのは基本無理なんだって。」

シルバ「いや、勉強しろよ作者…」

## 初出勤(2)(前書き)

もー幾つ寝るとお正月

遅くなつてすいませんoysz

・・・マジで終わんない

## 初出勤(2)

「アレこのジャケットって…」

「もしかして…」

スバルとエリオの声にリインが答える。

「みんなのジャケットは各部隊の分隊長さん達のもの参考にしてるですよ。ちよつと癖はありますが高性能です。」

「…」

「…はっ、スバル感激は後！」

いち早く復活したティアナがスバルをたしなめる。

次の瞬間、屋根が突き破られる。

《バリアブル バレット》

スバルはマツハキヤリバーで走り出し、ティアナはクロスミラージュで弾丸の生成する。

「シュートッ！」

魔力弾2発を屋根の上が上がってきたガジェットに当て撃墜する。

「うおおおっ！」

同時に、大きく開いた穴からスバルが車中へ飛び込み、真下に居たガジェットに拳を叩き込み撃破する。

「はあああっ！」

そのまま壁を垂直に走りガジェットに突っ込み破壊する。

床に着地するとスバルに向かって攻撃が放たれるが、しゃがんで避け、その姿勢のまま壁に向かって走り出す。

《アブゾーブ グリップ》

そのままのスピードで壁を駆け上がり、ナックルスピナーを回転させ、

「リボルバー……」

壁際に浮かんでいるガジェット目掛けて衝撃波を叩き込む。

「シュートッ！」



ドーンッ！！

「わあゝ！！」

あまりの出力に勢い余って屋根ごと突き破ってしまい、急に足場を失いスバルは慌てるが…

《ウイング ロード》

「えっ？」

マツハキヤリバーがウイングロードを展開し、隣の車両へスバルを移動させる。

「マツハキヤリバー、おまえってもしかして、かなりすごい？」

スバルの言葉を聞きマツハキヤリバーが光る。

「加速とか、グリップコントロールとか…それにウイングロードまで…」

《私はあなたを、もっと強く、速くするために作られましたから》

「でも、マツハキヤリバーにはA Iとか心があるんでしょ？だから言い換えよう。」

スバルはさつき出来た穴を見つめながら言う。

「おまえはね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ。」

《同じ意味に感じます。》

「違っんだよ、色々と」

《…考えておきます。》

「うん。」

【ティアナ、どうですか？】

ラインがティアナに訊ねる。

「ダメです、ケーブルの破壊、効果なし！」

ティアナは、スバルとは別行動を取り車両を止めようとしていたのだった。

【了解、車両の停止はわたしが引き受けます。ティアナはスバルと合流してください！】

「了解。」

《ワンハンド モード》

ティアナは二挺に拳銃していたクロスミラージュを元の一挺に戻す。そしてスバルと合流するために走り出す。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、弾体形成もサポートしてくれるんだね。」

《はい。不要でしたか？》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的には良くないんだけどね。でも実戦だと助かるよ。」

《ありがとうございます。》

キャロとエリオの2人は順調にガジェットを撃破し、8両目に入ったがそこには？型のガジェットが居た。

エリオとキャロの姿を確認したガジェットは、アームを2人に向かって伸ばす。2人はその場から大きく飛びのいて回避する。

キャロは着地と同時にフリードに指示を出す

「フリード、ブラストフレア！」

「キュクルー！」

「ファイア！」

ガジェットに向かって火炎弾を吐き出す。

ガジェットはアームでその火炎弾を弾きそのままキャロに向かって突き出す。

そのアームをキャロの隣にいたレグルスの体当たりで逸らす。

その隙にエリオが攻撃を打ち出す。

「てえええええい！」

大きく振りかぶったストラダを、渾身の力でガジェットに向けて振り下ろした。

「か、硬い…ッ！」

しかしストラダは、衝突の余波でスパークを撒き散らすも、ガジェットにダメージを与えられなかった。

「AMF…！」

ガジェットがAMFを発動さえ、ストラダに通っていた魔力が霧散してしまう。

「こんな遠くまで…！？」

かなり離れていたキャラの魔法まで打ち消されてしまう。

「くっ……！」

エリオは襲い掛かってきたアームをストラダで受け止める。魔法による補助なしでは辛いのか少しずつ押され始める。

それを見たキャラは急いで近寄ろうとするが…

「く…大丈夫、任せて…！」

エリオに止められる。

そのエリオに向けガジェットがレーザーを放つ。

それをとつさに上に跳び避けるが、直ぐに次の攻撃が来る。

次々と放たれるレーザーを転がることで避けるがアームによる攻撃を受け吹き飛んでしまう。

「うあああ…！」

さらにガジェットは気絶したエリオでアーム捕まえる。

そしてガジェットは屋根の上によじ登りエリオを崖に放り出そうとするその瞬間、

ドゴオン

上から来た何かによって車両内に叩き落とされる。

「よお鉄屑野郎！」

衝撃によって発生した煙の中から現れたのは、騎士甲冑に身を包み、気絶しているエリオを左腕に抱き抱えた大人シルバだった。

「シルバ君…！！！」

「俺の仲間が世話になったな。お礼にたたき壊してやるよ。」

声にはかなりの怒りが込められている。

「起きろよエリオ…レグルス！」

主に呼ばれたレグルスはすぐ隣に降り立つ。

「キヤロとエリオを頼む。」

《GAU!》

レグルスは一度吠えたと目を覚ましたエリオを背中に乗せ屋根の上にいるキヤロの元に行く。

「いくぜ！」

無事に離れたことを確認しシルバはガジェットに向かって走り出す。それに対しアームを突き出すが…

「断空拳。」

シルバの拳によって弾かれる。

そのままシルバは一気に距離を詰める。

「崩山拳！」

相手に振動を与え内部にダメージを与える技を受け、ガジェットは爆発を起こす。

「「すごい…」」

キヤロは自分たちが2人がかりで倒せなかった相手を簡単に倒したシルバの強さを見て思わず呟く。

「まだだな…」

「え?どうし…」

キヤロ達が聞き返す前に再び?型のガジェットと人型のガジェットが現れる。

「もう一機…!?!」

「それに…人型!?!」

「ちっ!面倒な…お前等は下がってろ!俺がやる!」

シルバは庇うように二人の前に立つ。

「いや…僕も手伝う!」

「私も戦う!…みんなを守るために力を使う!」シルバは二人の顔

を見る。

「…いい顔だ！デカブツ…三型は任せる！」

「うん！」

三人は同時に動いた。

## 初出勤(2)(後書き)

シルバ『暗い夜道はピカピカのおまえの鼻が役に立つのさ』

キヤロ「今回の相違点!」

シルバ「?型に捕まったのがエリオ・?型を倒した後追加のガジェ  
ットが…」

初出勤(3)(前書き)

連投

間に合わない…

### 初出勤(3)

「エリオ君！今からフリードを本来の姿に戻すから、少し時間を作  
って！」

「了解！任せて、キャロ！」

そう言うと同時にエリオはガジェットに向かって走り出し、キャロ  
は後ろの車両に飛び移り目を瞑る。

（守りたい…優しい人を…わたしに笑いかけてくれる人を…！自分  
の力で…守りたい！！）

《Drive ignition》

「フリード…今まで不自由な思いをさせてゴメンね。」

キャロは瞑想を解いてフリードに話しかける。

「今ならちゃんと…制御できるから！行くよ！竜魂召喚！！」

ケリュケイオンが強く光り輝き、次の瞬間キャロの体が少し浮き上  
がる。そしてさらに、キャロを包むように光の球体が発生する。

「蒼穹を走る白き閃光！我が翼となり、天を駆けよ。」

ケリュケイオンが再び、強く光り輝く。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

キャロの詠唱が完了すると、光の球体を吹き飛ばして白い飛竜が姿  
を現す。

「エリオ君！！」

キャロの声を聞くと同時にエリオはフリードに飛び移る。

「すごい…これがフリードの本当の姿…」

「フリード！ブラストレイ…ファイア…！」

フリードはいつもより強力な炎をガジェットに向かって放つが防が  
れてしまう。

「やっぱり、硬い…」

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きづらいよ…僕とストラーダがやる！」  
「うん！」



エリオの提案に頷き詠唱に入る。

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を。」

《Enchant Up Field Invade》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を。」

《Boost Up Strike Power》

「いくよエリオくん!!」

「了解、キャロ!! たあああ!!」

「ツインブースト…スラッシュ&ストライク!!」

《受諾》

ストラダの刃がキャロの魔力に包まれる。

「はああああ!!」

《Stahlmesser》

エリオはガジェットのアームを切り裂きながらリニアールに着地する。

《Explosion》

カートリッジロードして魔法陣を展開する。

「一閃必中!!」

決め台詞と共にガジェットに突進し、その中心にストラダを突き立てた。

「でりゃあああああつ!!」

そのまま刃を上へと振りぬぎ、ガジェットを両断する。

真つ二つになったガジェットは爆発を起こす。

「やったー!! やったよエリオ君!!」

「うん!!…」

ガシャアアアン

エリオが返事をしようとした瞬間、シルバが居る一つ前の車両が激しく揺れ、脱線する。

「なっ何が…」

エリオはとっさにフリードに飛び乗り呟く。

…時間は少し遡る…

エリオと同時に駆け出したシルバは、人型に高速接近すると首を掴み前の車両に叩き込む。

直ぐにシルバに向かって反撃が放たれる。

それをバックステップで避けて距離を取る。

「さつき奴のより動きが良いな…」

シルバは相手を睨みながら呟く。

「…お前…ガジェットか？」

「…!!」

シルバの声に人型は金切り声のようなものをあげながら、襲いかかる。

「…まるで獣だな…」

冷静に判断しながら避ける。

「断空拳!!」

そのまま人型の背中に右拳を叩き込む。

「…!!」

「…堅え…」

シルバは半壊した右手のグローブを見つめる。

「…本当は使いたくないんだが…仕方がない…」

わざとらしく肩を落としてから拳を構える。

「『聖王の鎧』 全力顕現…腕に集中…」

シルバが呟いた途端、両手に虹色の光が集まる。

「是・聖王の籠手…」

一瞬で近づくと拳を叩き込む。

「オラ！聖王断空拳!!」

「…」

シルバの拳をモロに受け人型は吹き飛び、動かなくなった。

「…ん？アレは…フリードか？随分とデカくなったな…」  
窓からフリードを眺めながら言う。

「それに今の爆発音…向こうも片付いたか…ッ！？」  
後ろから迫り来る風の音に咄嗟に避けようとするが何かに肩を貫かれる。

「クッ…」

自分の肩を貫いている、腕を刀に変えた人型を睨みつける。

「  
うれしそうな金切り声を出すと刀を引き抜き、そのまま逃げ去そうとする。」

「逃がすかよ！崩山拳（足版）！！」

ガシャアアアン

足から放たれた衝撃が床を伝い車輪を破壊する。

「  
！？」

「オラよ！聖王断空拳！！」

シルバの拳がバランスを崩した人型の腹の装甲に穴を空けるする。

「  
！！」

人型はシルバを蹴り飛ばすと今度こそ逃げ出した。

「チッ！！」

シルバは崖から落ち掛けている車両から飛び出る。

「クッ…」

「「シルバ（君）！？」」

仲間の声を聞きながらシルバは気絶した。

とある研究所で白衣を着た男が今回の機動六課の映像を見ていた。  
彼の左には通信用のモニターが開いており、そこには一人の女性が映っている。

「刻印ナンバー9、護送態勢に入りました。」

「ふむ…」

画面の女性の言葉に男が反応する。

「…何故アレを撤退させたのですか？」

「ふふふ、アレが戦っていた相手に興味があつてね…もし私の予想が正しければ、彼はこの案件の中でもっとも重要な。」

「はあ…」

男は画面に映った六課の前線メンバーとシルバを見つめながら笑い声を上げた。

初出勤(3)(後書き)

キャロ『雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろ』

シルバ「今回の相違点!」

キャロ「今回の話は新しく作られたやつなので全部!」

そんな関係やったとは…byはやて（前書き）

『初出勤』後の話です。  
かなり無理矢理感が否めません。

そんな関係やったとは…byはやて

「ここは…？」

シルバが目覚めると、知らないベッドの上に居た。

「六課…では無いな…」

「失礼します、陛下。」

「カリムか…ここは？」

ちょうど部屋に入ってきたカリムにシルバが尋ねる。

「聖王教会です。」すゝ…すゝ…「まさか一晩ここで過ぐしていたとは…」

自分の声を遮るように聞こえた寝息に、カリムは驚いたように呟く。  
「ん？」

「隣ですよ、陛下。」

カリムは首を傾げているシルバに言う。

「…キャロ？」

「はい。陛下が運び込まれてから、ずっと居たようです。」

「…俺が運び込まれたのは？」

「昨日の夕方です。」

「一晩中か…」

自分の隣で寝ているキャロを見ながら話す。

「ここでは話しにくいな…」

「そうですね…では執務室に移りましょう。」

シルバは怪我の所為で動かすことの出来ない右肩を固定した状態でイスに座っている。

「早速ですが…陛下、肩の怪我は何故…」

「『鎧』の移動を使った状態で、気を抜いてこのザマだ…」

「『鎧』を貫通した訳ではないのですね？」

「ああ、そこまでの威力は無かった。そこは安心しろ。」

不安そうなカリムにシルバが言う。

「…分かりました。もう一つお聞きしたいことが…」

「何だ？」

「陛下のデバイスなのですが…」

「ああ…敵の装甲に穴空けたとき、うつかり中に落としちまった（・  
………）。」

「……………」

不適に笑いながら言うシルバに、カリムは啞然とした。

シルバはあの後、デバイスの追跡をカリムに任せ、目を覚ましたキ  
ヤロと共に聖王教会の食堂に来ていたのだが…

「……………」

「…何やってるの？」

必死に左手を動かすシルバにキヤロが尋ねる。

「右手が使えないから左手で頑張ってたけど…食べない。」

「……よし！」

少し悩んでからキヤロは胸の前で拳を作り気合いを入れる。

「シルバ君…」

「ん？」

「あゝん…／／／／」

「???あゝん…」

顔を真っ赤にしながら食べ物差し出すキヤロに、不思議そうにし  
ながらもシルバは口を開ける。

「えへへ…／／／／」



「………… お楽しみの所、大変悪いんやけど…ちょっとええか？」

「…え？やつやつ八神部隊長！？」

いつの間にか現れたはやてにをかけられ、キャラは悲鳴を上げる。

「六課からお迎えに来たんやけど…まさか二人がそんな関係だったとは…」

「そんな関係？」

「わゝわゝわゝ…！」

キャラは何とかはやての声を遮ろうとする。

「恋人や。『あゝん』なんて恋人とか夫婦しかやらへんよ。」

「…は？」

「…／／／／」

「はあああああ！？」

シルバの叫び声が響き渡った。

そんな関係やったとは…byはやて（後書き）

シルバ『残った札はいらねえ…俺自身がジョーカーだからな!!』

キャロ「……／／／／」

シルバ「……／／／／」

はやて「今回レギュラーの二人が使い物にならないため、私とリンがやります!!」

リン「はいです〜！今回の相違点!!」

はやて「今回も全部新しい話やね。」

リン「そうですね〜ところではやてちゃんはクリスマス何してましたか〜？」

はやて「書類仕事。」

リン「…寂しいですねって嘘です！こっちに杖向けないでくださいです!!」

個別スキル（前書き）

今回も連投で

## 個別スキル

side リインフォース？

5月13日。

部隊の正式稼働後、初の緊急出勤がありました。

密輸ルートで運び込まれたロストログア〔レリック〕をガジェットが発見し、輸送中のリニアレールを襲撃。それを阻止、レリックを回収するという任務でしたが、六課前線メンバー一同の活躍もあって無事に解決。

ただし、シルバ君が未確認のガジェットと接触。戦闘の末、右肩に大怪我を負ってしまいました。

確保した刻印ナンバー？のレリックは、聖王教会にて嚴重封印中。

シルバ君の怪我などもありましたが、初任務としてはまずまずの滑りだした、と部隊長のはやてちゃん。六課の後継人、騎士カリムやクロノ提督たちも仰っているそうです、っと。

「リイン曹長。」

私は名前を呼ばれ顔を上げる。

「ああ！シャーリー！」「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌を付けていたですよ。」

「ああ、なるほど。」

開いていたモニター閉じてシャーリーの側に飛んでいく。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練所の方に行ってきたんですよ。」

「そうですか？みんな元気でした？」

「はい。フォアード陣も、デバイス達ももう絶好調。」

side out

「おら、いつくぞー!!」

ヴィータの声にスバルが身構える。

「うりゃああああ!」

「マツハキヤリバー!」

《Protection》

「でああああ!」

グラーファイゼンの一撃をスバルが受け止める。

「くうつ…」

「でりゃああああ!」

「うわああああ!」

しかし、少し耐えたもののヴィータに押し負け側にある木まで吹き飛ばされてしまう。

「ふむ…」

振り抜いた姿勢のままヴィータは感心した様な声を出す。

「いったた〜」

「なるほど…やっぱバリアの強度自体はそんなに悪くねーな。」

ヴィータは構えを解くとそう言う。

「あはは、ありがとうございます。」

そう言いながらスバルはヴィータの元に行く。

「あたしやシルバ、お前のポジション、フロントアタッカーはな、敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルや生存能力が高いほど、攻撃時間を長くとれるし、サポート陣にも頼らねーですむって、これはなのはに教わったな?」

「はい!ヴィータ副隊長!」

スバルは元気良く返事をする。

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛

ばされねーように、下半身の踏ん張りとマツハキャリバーの使いこなしを身につける。」

「頑張ります！」

《学習します》

スバルとマツハキャリバーがそれぞれ答える。

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからな。」

そう言いながらヴィータは、手首を使ってクラーフアイゼンを一回転させると、スバルに突きつける。

「クラーフアイゼンにぶっ叩かれたくなかったら、しっかり守れよ」

「はい！…あの少し質問して良いですか？」

「何だ？」

「フィールド系をいつも纏うって事は出来ないんですか？」

「…普通は無理だな。何でだ？」

「えっと…目を凝らすと、さっきのヴィータ副隊長が纏っていたのに似たやつを、シルバが纏ってる様に見える…気がするんです。」

「何…？」

ヴィータはその場で考え込む。

「あの…私、変なこと言いましたか？」

「ああ…いつも纏ってるなんて正気の沙汰じゃねー。普通は魔力が持たないはずなんだが…」

「じゃあ、私の気のせい…ですかね…？」

「ああ、多分な…」

そう言ったヴィータの顔はどこか晴れていなかった。

「エリオとキャロは、ヴィータやスバル、シルバみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば…」

スフィアがフェイトに向け、ゆっくりした弾を出し、それをフェイトは避ける。

「こうやって、こんな風に。まずは動き回って狙わせない。攻撃が当たる位置に…」

話しながら走っていたフェイトが一瞬立ち止まる。スフィアがその隙を見て攻撃するが、それをかわす。

「長居しない…ね？」

「はい！」

「これを、低速で確実にできるようになったら…スピードを上げていく。」

先ほどより速い弾をフェイトは確実に避けていく。次にスフィアから一斉に弾が出され、フェイトが煙の中に消える。それを見て息をのんだ2人に後ろから声がかかる。

「こんな感じにね。」

二人が振り向くと、いつの間にかフェイトが立っていた。

先ほどのフェイトが立っていた場所を見ると地面が抉れており、回避した道がわかるようになっていた。

「うわぁ…すごい…」

エリオが驚きの声を上げる。

フェイトはニコニコしながら話を続ける。

「今のも、ゆっくりやれば誰でもできるアクションを早回しにしてるだけなんだよ？」

「は、はい！」

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの。」

そう言うとフェイトは2人の肩に手を乗せる。

「ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートができるように。フルバックのキャラは、素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように。確実に、有効な回避アクションの基礎をしっかり覚えていこう。」

「はい！」

「キュクル」

フェイトの言葉に、エリオとキャラ、そしてフリードが元気よく返事をした。

桃色の弾とオレンジの弾がぶつかる。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

忙しく弾を撃ち続けながら返事をするティアナの足下には、空の力ートリッジが幾つも落ちていた。

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち避けたりしたら、仕事ができないからね。」

そう言いながら、なのはは指先に青い弾を呼び寄せる。

「っ！？バレット、レフトV、ライトRF！」

クロスミラージュに指示を出すティアナに後ろから弾が迫ってくる。

《警告》

「っ！？」

ティアナは思わず転がって避けてしまう。

「ほら、そうやって動いちゃうと、後が続かない！」

なのははそれを咎めながら、不規則な弾と青い弾を打ち出す。

《M V R F》

ティアナは不規則な弾を追う弾と、青い弾を撃ち落とす弾を撃つ。

「そう、それ！足は止めて、視野を広く！射撃型の神髄は…」

ティアナはその場に留まり、弾を次々打ち落としていく。

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして命中させる。判断速度と命中精度！」

《リロード》



なのはの言葉を引き継ぎながらティアナはリロードし、撃ち続ける。  
「チームの中央に立って、誰より早く中長距離を制する。それが、  
私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ。」  
「はい！」

「いや〜やってますね〜」

「初出勤が良い刺激になったようだな。」

シグナムとヴァイスが4人の訓練をモニターで見ながら話をしてい  
る。

「いいつつねえ〜若い連中は。」

「若いだけあつて、成長も早い。まだしばらくの間は、危なっかし  
いだろうがな。」

「そうつつすね。あつ、シグナム姉さんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな…スバルやエリオのようにミッド式と混じ  
った近代ベルカ式とは勝手が違うし、剣を振るうしかない私がバツ  
クス型のティアナやキャロに教えられる様な事もないしな…まあ、  
それ以前に私は人に物を教える、という柄ではない。戦法など届く  
距離まで近づいて斬れ、ぐらいしか言えん。」

「ははは…すげー奥義では有るんですけど…確かに連中には、まだ  
ちいーと早いですね。」

「だから私に出来る事と言えば、経験が足りないシルバに付き合う  
ぐらいしかない。」

「そう言えばシルバはどうしたんすか？」

「思い出したようにヴァイスが言う。」

「まだ安静状態らしい。今日の検査で大丈夫だったら明日から参加  
だ。」

「…アレ？昨日走り回って無かったすか？」

「走り回ってたな。」

「で、その後部隊長に怒られてましたよね？」

「怒られてたな。」

「…そろそろ部隊長のいに穴が開くんじゃないですか？」

「ああ、かなり多く胃薬を飲んでおられる。」

そう言くと2人は同時にため息を付いた。

ピー

「はあい、じゃあ午前の訓練終了。」

「…はあ、はあ、はあ、はあ、」

「はあい、お疲れ」。個別スキルに入ると、ちよつときついでしょう？」

訓練でかなりグロッキーになっている4人に、なのはが話しかける

「ちよつと…と言うか…」

「その…かなり…」

「フェイト隊長は忙しいから、そうしよつちゆう付き会えねえけど、あたしは当分お前等に付き合ってやっからな。」

「あっありがとうございます…」

ヴィータのあまり嬉しくない話しに、スバルは苦笑いしながら答える。

「それからライトニングの2人は特にだけど、スターズの2人もまだまだ体が成長してる最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように。」

フェイトが少し注意をする。

「…はい！」「…」

「じゃあお昼にしよつか。」

「…はい！」「…」

7人が隊舎に着くと、はやて、リイン、シルバの3人とそれを見送りに来たシャーリーとあった。

「あつみんなお疲れさんや。」

「……はい!」「……」

「はやてとリインは外回り?」

「シルバ君も一緒ですよ、ヴィータちゃん。」

「うん。私とリインはちょナカジマ三佐と、シルバは聖王教会で精密検査や。」

はやての言った名前にティアナとスバルが反応する。

「スバル、お父さんやお姉ちゃんになんか伝言とか有るか?」

「いえ、大丈夫です。」

「それじゃあ、はやてちゃん、リイン、シルバいつてらっしゃい。」

「ナカジマ三佐とギンガによく伝えてね。」

「うん。」

「いつてきまゝす。」

「じゃあね〜」

3人の挨拶が終わるとはやては車を発進させた。

おまけ

「しっかし、このオンボロ大丈夫なのか?」

「なんやと!」

「大体ちゃんと運転できんのか?」

「出来るわ!!」

「はっ！どうだか…」

「…こつから叩き落としてやるか？」

「あわわわわ」

こんなやりとりが車の中であつたとか…

## 個別スキル（後書き）

シルバ「ついに名言をやめたか…」

キャロ「とりあえずスピーディーにここっつてことらしいよ?」

シルバ「ふん。まあともあれ今回の相違点!」

キャロ「リインさんの日誌の内容、スバルさんたちの会話、シルバ君のバカな行動…ですね。」

シルバ「…バカ…orz」

## 進展

side シルバ

「ほな、また後で迎えに来るからな。カリムによろしく」  
「はいよ。」

はやてと別れ裏口から聖王教会の中に入る。

「お待ちしておりました、陛下。」

「カリムは？」

「執務室居ります。」

「わかった。」

side out

コンコン

「どうぞ。」

執務室のドアをノックし中に入る。

「おじゃまします。」

「はい。どうぞお掛け下さい。」

「はいよ。」

シルバはカリムと向かい合うように腰掛ける。

「右肩の調子はどうですか？」

「もう箸を持つ程度なら大丈夫だ。」

「それは良かったです。」

「んで？世間話のためにわざわざ俺だけを呼んだ訳じゃないだろ？」  
さつきまでの和やかな風陰気を消す。

「…はい。昨日、彼女が目を覚ましました。こちらが彼女の今の状態です。」

カリムがモニターを出す。

「…それで？」

「彼女は地上本部に所属していた召喚士の様です。」

「『していた』？」

「はい。彼女の所属していた部隊は約8年前に壊滅させられています。」

「壊滅…って事は死亡扱いか？死体が見つかってないのに？」

「いえ…見つかっているんです…」

「…何？」

シルバが眉を顰める。

「死体のDNA鑑定なども行われており確実に彼女と断定されています。」

「そのナンタラ鑑定ってのは分かんが、今居る方が偽物って事か？」

「いいえ…100%本人です。」

「…………双子か？」

「違います。」

「訳分からん…」

シルバは頭を抱える。

「…彼女に俺が会うことは出来るか？」

「まだ意識が戻った程度なので、時間が決まってい…」

「いきなりは無理か…」「申し訳ありません。」

「取り敢えず大丈夫な日が分かったら連絡をくれ。」

「かしこまりました。それと…もう一つお話が。」

「何だ？」

「彼女の話によると襲撃者は魔力とは違う力を使っていたそうです。」

「…やはりレリックの使用目的は、魔力の特殊変換…ってことか…」  
「では…」

「ああ…生体兵器の強化パーツとして使ってやがる。」

シルバは椅子に深く座り直す。

「今回解ってるデータと壊滅した部隊の情報をコピーしてくれ。一度目を通しておきたい。」

「かしこまりました。」

丁度その時、モニターが現れる。

「騎士カリム、騎士はやてがいらつしゃいました。」  
もうそんな時間か…

「じゃあ、今回はこれでお開きだな。」

「はい。こちらが資料です。」

小さい端末を渡される。

「ありがとう。また進展があつたら、呼んでくれ。」  
「分かりました。」

和風な食事処

はやて、シルバはナカジマ家2人と食事をしていた。

「こいつがお前の言っていたガキかい。」

「はい。聖王教会からの派遣…言う扱いです。」  
ゲンヤの質問にはやてが答える。

「私はギンガ・ナカジマ。よろしくね?」

「俺はシルバだ。よろしく。」

「坊主は何歳なんだ?」

「12だな。」

「シルバ…目上の人には丁寧語使わなあかんよ?」

「…さつきから何なんだ? いい子ぶって…これだから子狸は…」  
「子狸言っつな!」

「おい! テメー等少し静かにしろ!」



結局、最後はゲンヤの一言で静かになった。

.....

「しっかし、旨い魚だな、これ。」

シルバが焼き魚を食べながら言う。

「おう。この店の焼き魚はミッド1旨いからな。」

シルバの言葉にゲンヤが答える。

「店の雰囲気も良いし。」

「分かってんしゃねえか、坊主。」

どうやらシルバはゲンヤに気に入られたようだ。

「うん？フェイトちゃんからの通信や。」

そう言っではやてはモニターを出す。その横で、

「これも一匹食うか？。」

ゲンヤがシルバに小魚を薦めていた。

「いいのか？」

「おう、ガキは遠慮すんな。」

「サンキュー。」

そんな会話をしている...

「ふう」

はやての通信が終わる。「何か進展ですか？」

ギンガが訊ねる。

「事件の犯人の手掛かりがちょっとな。」

そう言っではやては席を立つ。

「と言っわけですいませんナカジマ三佐。私達はこれで失礼させて

貰います。」

「おう。」

そう言っ伝票を取ろうとするが、ゲンヤに取られてしまう。

「そんな」

「さっさと行ってやんな、部下が待ってんだろ。」

はやてを見ながらゲンヤが言う。

「はい。ほら行くでシルバ。」

「まだ食ってんだが…」

「仕事や諦めえ。」

はやての言葉に、名残惜しそうにしているシルバを見てゲンヤが言う。

「また今度一緒に来るかい？」

「いいのか？」

「ああ。その時やスバルも連れてこい。」

「分かった！ほら行くぞ、はやて。」

「ちよっ待ちい。それではまた。」

はやてがそう言って2人と別れる。

薄暗い研究所で白衣を着た男と青い服の女が、人間の様な物が入れたポットの並んだ通路を歩いてた。

「まさか彼女が奪われたのに1ヶ月も気付かないとはね…」

「…申し訳ありません…」

女が男に謝る。

「まあ、構わないさ。」

「ゼクトとルーテシア活動を再開しました。」

奥の広間に着くと女性の写るモニターが表れ、報告をする。

「うむ。クライアントからの指示は？」

「彼らに無断での支援はなるべく控えるように、とメッセージが届いています。」

「自立行動を開始したガジェットは私の完全制御下に居る分けじゃないんだ。勝手にレリックの元に集まって行くのは大目に見て欲しいね。」

「お伝えしておきます。」

「彼らが動くならゆっくり観察させて貰うとするよ。彼らもまた貴

重なレリックウエポンの実験体なんだからね。」

そう言うとモニターを閉じる。

「しかし…こちらに彼女が居ないと知れば、襲ってくるのでは？」

「大丈夫さ。彼方も直ぐには動かないだろうからね。それに…」

男は一つのポットに歩み寄る。

「貴重とはいえ単に適合率が高いだけ…彼らよりコレの方が興味深い。」

そう言うと男は笑った。

## 進展（後書き）

キャラ「今回の相違点!!」

シルバ「カリムとの会話、戦闘機人の情報の手に入れ方、ジェイ…  
ジェイ…なんとかの台詞」

キャラ「そろそろ覚えようよ…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3793z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

2011年12月26日22時10分発行